

[エチオピア]

人々の暮らしと森を守る 森林コーヒー

エチオピアの森で暮らす住民たちが昔ながらの自然農法で生産した“森林コーヒー”。Rainforest Alliance の認証を受け、日本にも輸入されることが決まった。

Close Up!

ジャイカのアシあと



燦さんと照り付ける太陽の下、真っ赤な果実が天日干しされている。貴重な森林生態系を有するエチオピア南西部ベレテ・ゲラ地域の森で栽培・収穫されたコーヒー豆だ。

かつて国土面積の約35%が森林だったといわれるエチオピア。だが近年、過度の伐採や人口増加の影響で11%（森林生態系を有する自然林の割合は3%程度）まで減少し、森でできるコーヒーやちみつに収入源を頼る住民の生活は切迫していた。

そんな中、JICAは2006年10月から森林の保全・管理と住民の生計向上の両立を目的に「ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画プロジェクト」を実施している。プロジェクトでは、同地域の住民組織である森林管理組合（WaBuB）が地方政府と森林管理契約¹を締結することにより、森を適切に保存しながら、農薬や化学肥料を使わない昔ながらの農法でコーヒーを栽培。その商品価値を高めるため、Rainforest Alliance（RA）²の認証取得を目指した。

チャーファドバイザーの西村勉専



門家によれば「文字を書ける慣れない住民たちは、認証審査を受けるために必要な各種書類作成に苦労した」。それでも500人以上のWaBuBメンバーが参加し、認証めがけて一致団結。そして、厳しい審査をくぐりぬけ、07年11月、ついにRAの認証を手に入れた。さらに、コーヒー輸出業者と契約を結び、市場価格に対して15〜25%のプレミアム価格で買い取られることに。住民は「これからも貴重な森と未長く共存していきたい」と誇らしげに語っている。

森林コーヒーは、日本にも輸出され、今年5月に開催される第4回アフリカ開発会議の関連イベント「アフリカンフェア」にも出展される予定だ。



1 立入禁止区域である森林優先地域に住民が住み、コーヒー、養蜂などの利用権を認められる一方、住民は、伝統的な森林利用・保全を継続することが義務付けられる。 2 土地の利用法、商取引、消費者の行動の変革により、生物多様性の維持、持続可能な生活の確保を使命とする国際NGO。生態系保全や労働者・地域社会の権利と福利の保護など社会・環境・経済的な側面からの基準を満たす農園や森林に認証を与え、認証農産物や木材製品を購入することで消費者は環境を保護し、持続可能な開発の促進に貢献できる。